季刊生命の島　６８号　２００４．９．２５発行　定価９８０円　　http://www8.ocn.ne.jp/~seimei39/68.htm

島をまもって半世紀――西表島の神司・田盛雪さんのお話

安渓貴子・安渓遊地

神司という仕事

沖縄の伝統ある集落には必ず御嶽（ウタキ）という宮がいくつもあります。そこで祭祀を司るのがノロといわれる女性であることはよく知られています。御嶽を西表島の方言では、ウガンとかウガンジュ（強いて漢字をあてれば御願所か）と呼び、ノロは、チカと呼ばれます。チカは、チカサとも言いますが、神司と書くこともあります。

今回は、西表島のチカであられた田盛雪（たもり・ゆき）さんにうかがったお話です。田盛さんは、西表島西部の祖納（そない）村の数ある御嶽のひとつのクシムリウガンというお宮の神司を五十三年間も勤められた方です。この仕事の収入は氏子一人あたり一年に五勺（一合の半分）のお米と定められていて、いまの言葉でいえばボランティアとしか言いようのないものです。チカは女性に限られ、しかも特定の家系から選ばれます。チカの兄弟から男性の補佐役が選ばれ、チヂビと呼ばれます。村の年中行事をはじめ、神行事としての島の祭の中枢部分を担うのが、このチカとチヂビという姉妹（方言でブナリ）と兄弟（ビヒリ）なのです。このように女性は、集落の守護神の役割を果たすだけではなく、家庭でもブナリカン（姉妹神）として兄弟の守護神としての霊的な役割をもつのです。

長年にわたって神司の大役をつとめられた田盛雪さんは、二〇〇二年の末に神司を「卒業」して、普通の人に戻られました。そのあとの二〇〇四年の二月に約十時間にわたって親しくお話をうかがう機会に恵まれました。田盛さんとは、これまでも島での行事の折々に声をかけていただくことはありましたが、神事にたずさわっておられる時には、自由に話すという機会は少なく、話題の選択にもおのずからなる慎みがともないました。今回は、神司に選ばれた女性の苦悩や喜びなどの心情を含めてお話をしていただくことができたのでした。この訪問を受け入れてくださった、田盛雪さんと娘さんご夫妻、そして何より西表島のカン（神様たち）に心から感謝いたします。

芸能一家に生まれる

私は、大正十一年二月十四日に西表島の祖納（そない）に生まれました。バレンタインデー生まれなんですよ（笑い）。私の父は大浜用明という名前でした。屋号はミナンテといいます。うちの家系は、みんな芸能人というか、芸達者で、キョンギン（狂言、愉快な寸劇）なんかが上手でした。父なんか、色白できれいな人で、サンシン（三弦）の歌を作ったりもしていました。三十二歳でなくなっています。母は子どものしつけには厳しい人でしたが、八十七歳まで長生きしました。

神司から逃げようと那覇・台湾へ

私は小さい時から御嶽にも行ってチカ（神司）の仕事がどんなに大変かわかっているつもりでしたから「こんなことはするもんか」と思っていました。でも、「あとは　雪ちゃんが継ぐのよ」と周りからはいつもいわれていました。私は、学校を出たら高等科に進みたい、と言いかえしていました。でも、親は神司をさせるつもりだったんです。

それで、私は卒業したらすぐ、遠い那覇に出ました。旅館をしている親戚の家においてもらっていたら、下宿していたアメリカ人の夫婦が「アメリカにおいで、洋裁を勉強したらいい」といいました。私が十六か十七の時です。うれしかったけれど、戦争になってその人がアメリカに帰ることになって、私はアメリカに行かれずじまいでした。ちょうどその時西表から「ハハキトク」という電報が来ました。急いで島に帰ってみたら病気でもなんでもなかったのです。アメリカにでも行ってしまったら大変だよ、とだれか告げ口したんじゃないかな、と思いました。

西表には一か月ぐらいおったんですが、なんだかしゃくにさわってねぇ。今度は台湾に逃げました。台湾でアルバイトをしながらお金を一生懸命ためて、和文タイプの資格を取ろうと練習をしたりしながら、たまたまあったバスガイドの試験を受けたら不思議に受かったんです。口頭試問というのがあるというので行ったら、筆記試験の時には千人もいたのに、もう十人ほどしか残っていません。その時の格好ときたら、かわいそう！田舎から出て行って袖の長いYシャツブラウスにジャンパーで、靴も田舎靴でしたよ。「あなたはなんでそんな難儀な仕事をするの？この仕事は朝から晩まで立ち通しで、足なんかぱんぱんに腫れるよ」という質問をされました。

「私は、バスガイドが好きだからやります！」と答えて、合格になりました。

バスガイドは一年余りやりました。口頭試問で言われた通り、一日中立っているから、足がすごく腫れる難儀な仕事でした。兵隊の胸の金の筋何本という人、勲章何個という人はお金を払いません。「乗車券お願いします」と言っても黙っていて何にも払わないのです。胸に役所マークがある人も払いません。役人や兵隊の位が高い人はバス賃を払わないでいいという規則だったんですね。はじめはそれがわからず、大変でした。

八重山から観光旅行に来た人たちが、ガイド・コースは色々あるのに、「ぜひ大浜雪のバスに乗りたい」というお客さんが多かったんです。乗り切れなくて「降車お願いしまーす」と言って、次の車にしてもらうこともありました。「お中にお入りくださーい」と言ったら、「お腹に入れたら満腹になる」とか言ってお客さんが笑ったりしていました。女中奉公が月に二円五十銭のころに、バスガイドで十円というお金をもらっていました。自分でも使うけれど、西表の母にも送ったりしていました。

二度目の「ハハキトク」

そのうち「ハハキトク」という電報が来ました。「ははーん、まただな」と思っていたらまた来たので、あわてて島に帰ったら、今度は本当に重病でした。帰ってきたら知り合いの青年が一生懸命、母を助けてくれていました。この人が母ちゃんを助けてくれたんだよとみんなに勧められて、この人に助けられたんだから、仕方ないと思って結婚しました。親たちが決めていて、もう私の自由にするすきまがなかったのです。この人は「雪ちゃんとなら自分は婿養子にはいってもいい」といってくれたんです。夫はバカヤロウとかキサマとか言ったことがないやさしい人でした。そして、とうとう御嶽に入って、祖納村のアマチカ（天候を祈願する神司）になりました。二十歳になっていました。

神司の引き継ぎの儀式をツギユリといいますが、私がアマチカをついだ当時は盛大でしたよ。牛一頭と豚一頭つぶしてご馳走をつくるぐらいのたいへんな儀式だったんです。

神司のやくわり

チカに就任したら、まず御嶽の拝殿の中に神司のピヌカン（火の神）をビヒリ（兄弟）が作ってくれます。ピヌカンは、丸い石を三つ座らせて、そこでお湯をわかす炉でもあります。海からもってきたやわらかい石を四角く削って中をくりぬいて香炉もつくってもらいます。

ピヌカンは、冬至に天に昇って下界であっ

たことを報告して、また戻ってくるといいますよ。御嶽のピヌカンはもちろんですけれど、普通の民家でも、かまどの前で口論するなといいますよ。もしもピヌカンが天に昇って悪い報告をされると困るでしょう。

私はクシムリ御嶽のチカですが、もうひとり、ムトゥ（本）チカがおられて、こちらは、祖納の宮良チエ子さんが、私といっしょに交代されるときまで五十年間勤められました。アマチカの仕事の分担はアマニガイです。アマニガイというのは、天候についての祈願の全部といっていいでしょう。

昔、祖納には神司が十人もいました。ウブ御嶽二人、パナリ御嶽一人、ケダシケ御嶽一人、オオタケ御嶽二人、マエドマリ御嶽一人、ナリヤ御嶽一人、そしてクシムリ御嶽二人です。交差点でおおぜいのチカが出会うことがありました。

祖納に住んでいれば、毎月旧暦の一日と十五日にお茶湯（ウチャドー）のために御嶽に行きます。お茶湯というのは、お茶をあげて、線香を立てることです。神様といっしょにお茶を飲んで、タバコ吸う人は吸って、十二時前には帰ってきます。

その他にも、季節季節に、神行事があります。

神行事で、神司が着る白い着物をチョーキヌといいます。私のものは、ブー（苧麻）を母が績（う）んでくれたものを、自分で織りました。ミンサーの帯も織ったことがありますよ。神司の衣装はナナカサビといって七枚重ねが決まりです。

いつも着物を合計で七枚もつけているんですから夏は暑いですよ、暑いけどどんなに日が照っても、どんなに雨が降っても神司は照らされ通し、降られどおしで、傘をさしてはいけないんです。だから着物は夏用も冬用もたくさん持っていました。行事で石垣島から西表島に渡るたびに、それが大きな荷物になってねぇ。

チヂビは、紋付き袴で御嶽に詣でたものですが、今は背広で済ます、そういう時代になりました。経済的に無理させないでおきたいという気持ちもありますし……。

御嶽の奥のイビという所には、男は入ることが許されません。だから、チヂビは御嶽の掃除をするんですけれど、イビとの境界のシクザの所までです。こんど新しく交代したチヂビには、そこまでがあなたのシュクブン（職分）と教えてあります。御嶽のシクザの奥の掃除は人にさせません。それは神司のシュクブンだから。

クシムリ御嶽のイビには、クバ（ビロウの木）が倒れてきていて、イビの香炉の前に行くのに、かがんでクバをくぐらないと行けないのです。それがさらに落ちてきてまたいで乗り越えてきました。けれど、年をとって足が痛いのに乗り越えるのがたいへんになったので、あれを切って鳥居にしてもらいたいと言ったことがあります。

雨乞いをする

私が御嶽に入って神司になって六年目ぐらいの一九六〇年ごろの夏のことです。雨が全然降らないことがあって、みんなが困りました。そこで、雨乞いの祈願をしようと相談がまとまりました。雨乞いは、葛を頭にくくって、御嶽の中央のシクザという所の真ん中にキダキ（和名リュウキュウコクタン）の木を立てて、私が中心になって、そのまわりを十人ぐらいの神司が雨乞いの歌を歌いながら回りました。雨乞いの神歌をうたえば、大雨が降るから、普段は歌ってはいけません。バケツに水を入れてヤシの葉で作ったピダリ（ひしゃく）で水をくんでみんなにかけて、回りながら神歌を歌います。それを一日繰り返して、クシムリ、オオタケ、キダシケの祖納の高台の御嶽を回り、それから石畳の道を歩いて降りて、マイドゥマリ、ウブ、パナリのをそれぞれの御嶽に行って、最後のパナリウガンで白い神の衣装のチョーキヌを脱いで、家に帰ってきました。

御嶽での雨乞いの歌

アミタボラリ
　雨を下さい
タングカチマシ
　田という田
タバルカチマシ
　田原という田原を
アフラシタボラリ
　あふれさせてください
アダティカマヌ　クシカラ
　アダティ（地名）の窪地の後ろから
ドロドロシタボラリ
　どろどろと流しでください

そのあと、村中の人がみんな参加しての雨乞いになるんです。

ところが、それほどにしてニガイ（祈願、ニンガイともいう）しても、雨が降らなかったんです。

父と同年配の親戚で崎山用能さんという人から「あれほど村中で儀式もしたのに何で雨が降らないのか」と叱られました。それで、「いま、干立村のチクラヤンの神さまとこっちの山の神さまが相談しているところです。浦内川上流のカンビレーの平らなところに集合して相談しておられるところですよ」と答えました。そうしたら、「頭があるからと思って理屈ばかりこねる」と言われてしまいました。

さあ、どうしても雨が降ってくれないので、私は雨を降らすために、朝早く村はずれのアゾニカーという井戸の所にいって祈り始めました。うす暗いけど、気持ちがそうなっていますからこわくないの。朝早くは誰も水汲みに来ていませんから、着物をぬいで水をかぶりながら、泣いて祈ったんです。夏だから寒くはないんです。泣きながら祖納岳に向かって東向きに祈りました。そうすると、祈っている時にピシピシと少しずつ雨が落ちてくるんです。着物も洗って、しぼってまた身につけて帰ってくるということを続けました。母なんか「あんな難儀せんといかんかねぇ」といいつつ、私の気がすむように見まもってくれていました。

十日ほどして、やっと本格的に雨が降ったんです。私を叱った人も、「そうねえ、あんたのニガイを神が聞き届けてくれたね」とねぎらってくれました。

仲良川での雨乞いの儀式

私の代の五十三年間には、雨乞いは一回しか経験していません。私の祖母（お父さんのお母さん）の姉妹が祖納のアマチカだったころの雨乞いの時には、雨乞いの時には仲良川のトゥイミャーパラ川の淀に沈んでいる、大木を削ってきてニガイしたときいています。

――郷土史家の星勲さんにうかがったお話では、いつのことか――いまから五百年以上も昔のことと言われていますが――西表島の人々が宮古島の有力な首長の豊見親（トゥイミャー）の命令で、宮殿造営の材木を切り出すことになったそうです。その場所が、仲良川の上流のトゥイミャーパラ川なんですが、「豊見親の柱の川」という意味だそうですね。ところが大木を切り出して、下流に流そうとしたところ、水量が少ないので雨乞いをした。その地名がアミクイユドゥですが、雨乞い淀という字があたるでしょうね。

トゥイミャーの命令で、材木を縛るのに使うクチ（和名トウツルモドキ）も採らされたそうですよ。西表島のクチは木にぐるぐる巻いています。ところが石垣島のものは竹のようにまっすぐになっています。そのいわれは、トゥイミャーがクチを採るように言ってきたので山で準備していたら、トゥイミャーが死んだという知らせが来たんです。それを聞いて、喜んだ西表の人たちは、丸く輪にしていたクチを山に投げて捨ててきたから、それ以来西表島のクチは曲がって生えるといわれています。だから西表では篭をつくるのも難儀なことです。

昔のしきたり

昔はね、インドゥミ、ヤマドゥミ（海止め、山止め）というのがあったそうです。旧暦の

四月ごろでしょうか、海にも山にも行かないし、山の中の田小屋（シコヤ）にも泊まらないのです。この禁をやぶって泊まった人が、ガヤ（チガヤ）でつくった壁から槍が出るなどという恐ろしいことがあったそうです。海に行ってもだめです。また、この季節は海の貝を食べません。スナヌヤナムヌ（海の変なもの）といいますが、食べたら毒になるものが入っているからです。

石垣島に引っ越して

私が子どもを産んでから、夫はよく私のことを心配してくれました。夫は郵便局員をしていたけれど、終戦になってそれだけでは食べていけず、私は母と田圃を開墾してお米をつくって、食べるだけなら満足に暮らしていました。それでも子どもを石垣島の学校にやるのにお金がかかるから、石垣島に出て暮らすことにしました。西表島の家をくずして石垣島に移築しました。石垣島に引っ越してからは、一日、十五日に御嶽に行くことはできなくなってしまいましたが、行事には欠かさず西表に通ってきました。

夫は石垣島では、建築の仕事や船をつくる仕事などをしていましたが、六十九歳で亡くなりました。それから丸一年して、同じ日にこんどは母が亡くなりました。二人が健在のころは、いろいろと神司の仕事を手伝ってもらっていましたが、一人になってからは、みんな自分でやらなくてはいけなくなってしまったんですよ。

神司の祈願の力

西表島の干立村出身の男の人が病弱で喘息が治らないで困ったことがありました。病院に見せても治らない。あっちこっちのユタ（職業的霊能者）に聞いてもわからない。どうしても私が西表島の神様に祈らないと治らないと、奥さんが言いにこられたんです。

しばらくして案内があったので西表に渡ってみたら、大きなお膳に重箱をいっぱい並べたバキトゥリブンというものを準備していらっしゃったんです。その準備に手間がかかったんですねぇ。頼んだ人たちは、これを頭に載せて、クシムリ御嶽まで石畳の道を上がって行くんです。

実はね、この病気の人のお母さんが、昔はこのクシムリ御嶽のアマチカだったというんですよ。どこにお参りに行っても治らないけれど、クシムリ御嶽のアマチカの戌年の人に――名前は言わないのよ――拝ませたら治る、と言われたといって来ました。私は戌年なので、これは、私がしないといけないというようになりました。私も驚いてね。同じクシムリ御嶽の神司の宮良チエ子さんもいっしょに座ってくれましたが、「雪ちゃんねえさん、あんたが元だよ。あんたが責任もってやらんといけないよ」と言われます。先輩の神司のおばあさんにも注意されました。「人を助けるようなこういう祈願は、心をこめて一生懸命しないといけないよ。一番難しい祈願だから。」

私は、もうびっくりして、心配で頭の中はもうこんなに沸き立っています。頼みに来た人たちは、きっと治してもらえると信じて来ているんですから。もう、震えながら涙が出るほど一生懸命にお祈りしました。

翌日、石垣島に帰って、その病人のお見舞いに行きました。そうしたらね、門から入ったら、今日明日の命と言われていたそのおじさんが一人で、起きて元気にしているんですよ。「あんたなんかがニガイしてくれたちょうどその時間に、僕は咳が止まってよ、助かってこんなに元気になってしまったさぁ。だから、ずっと看病していた嫁さんには今日からもう仕事に行っていいよ、といって行かしました」とおっしゃるんです。

――すごいですねえ！

すごいねえ、先生。私も驚いてるよ（笑い）。それ以来元気になられてね。そのあと運動会があって受付の所に着いたら、遠くのテントから「雪ちゃーん！雪ちゃーん！」と大声で呼ぶ人がいるんです。行ってみたら、その時に頼みにきた夫婦でした。「あれ以来うちの

おじさんは元気よ！咳もしないし、あんなことがあるもんだねえ」と言うんです。私もうれしくてねえ。「ありがとうね」といいました。それっきり元気になられました。

こんな経験をしたことは初めてでした。

家を建てる時の祈願

家を新築したら、山の入り口にニガイをしに行きます。子どもの時に見たことです。

海からとったユリミナ（和名マガキガイ）の殻をきれいに並べ、釘も並べます。お米を白紙に七粒入れて十個。これを山の入り口に持っていきます。

ユリミナは牛の代わりです。釘（鉄）は鏡の代わり。米粒は米俵の代わり。こうして準備してささげます。家を建てる材料をいただいた山にお礼をするわけです。昼のうちに山の入り口に年かさの女の人が二、三人で行ってニガイして、夜は新築の家でアーパーレーという祝いの歌をうたい、ヤータカビ（家崇び）の儀式もします。

ユリミナはだしが出ておいしい貝です。島に行くと殻が捨てられているので、ニガイに使うといいね、と思って洗ってとっておきました。でも私の時代にユリミナを使うことはもうなかったのです。

ほかに神様に関係する貝というと、浦内村のトゥドゥマリの浜の貝（和名トドマリハマグリ）があります。これに病院の膏薬や紅を入れたりしていたんです。この貝はきれいな貝で大事にされたんですが、みんなが採りすぎたのか、やがてこの浜は神様の浜だから採ってはいけない、といって採らさないようになりました。

最近、クシムリ御嶽の拝殿をりっぱに改築したんです。その時に、若い人たちが普通の家や公民館みたいに、落成を祝うヤータカビをしたいといい出しました。

でも、ヤータカビのもともとの意味は、ソーチ（精進）して清めることなので、御嶽ではたとえ改築してもそういうことはしないでいいし、したこともないのです。御嶽はもともときれいなところで、清められているんですから。

――なるほど。与那国島では、新築の儀式をミーダイと言っていますが、家を建てるために石や木や竹などの大自然の材料を使わせていただいたお礼を宇宙の神々にするという意味だそうで、その儀式のあとはじめて家は神々の世界から人間界に渡されるという説明でした。それから考えると、御嶽の拝殿はずっと神様たちの世界そのものですから、ヤータカビも必要ないわけですね。

神司の交代の儀式

ツギユリという儀式をして神司の交代をします。ツギユリをするのは午（ウマ）か酉（トリ）か寅（トラ）の神年を選びます。私が御嶽に入ったのは寅の年でした。今回のツギユリは午の年でしたね。今しなかったら今度は酉の年まで待たんといかんでしょう。それまで健康が保てるかどうかわからなかったので、思い切って午の年に卒業しました。

昔は司会者がいて取りしきったものでしたが、今は式次第をわかる人がいないので交代する私自身が進行役をつとめました。もう、神司の交代の儀式のことをわかる人が私ぐらいしかいなくなってしまいました。二〇〇二年の冬至の儀式が終わってすぐ引継ぎをしました。御嶽に行って、神様の許可をいただいて交代しました。

みんな何をしていいかわからなくてさわいでいました。だれか、始めから終わりまでずっと参加して、この行事のやり方をいっしょにやって覚えてほしかったです。ちょうどその日は、村の家の地鎮祭なんかと重なってしまって、出入りが多かったんです。

その時の様子を先生方に見せたかったさぁ、私。後継ぎのビヒリ・ブナリ（兄弟姉妹）を並んで座らせて、その後ろにチエ子さんと私がすわって、ビヒリ・ブナリの三三九度の杯を交わします。まるで結婚式のようでもあります。こうして、ビヒリがチヂビに、ブナリがチカに就任するわけです。実はわたしの

後継ぎにあたる人はまだ名乗り出ていません。とっても残念なことです。

私が引退して、アマチカもいないのにアマニガイしなければならなくなった時のために、どう祈るのかということを書いて公民館に残してあります。

蜂に刺されて

二〇〇二年秋のシチ（節祭、豊年を予祝する）の時にひどく蜂にさされました。明日からシチ祭という時、パイドゥン（拝殿）を掃除しているときに、放送局の人が取材にきて話をしていたら、自分の時間がなくなったので、急いで祭に使う葛を切りに行った時、クマバジ（スズメバチの類）の巣があったんです。いきなりものすごく刺されてねぇ。いつも被る帽子もかぶってなくて、髪の毛の中にもいっぱい入って刺していました。「たすけてー！」と言いながら御嶽から山を走って下りました。でも、村には誰一人いないんですよ。人がいないのは当たり前、みんな明日の準備に公民館に集まっていたんです。ようやく公民館にたどりついて、病院につれていってもらいました。体中刺されて、手の指も曲がらないほど。顔が腫れて、目も見えないのです。年に一度の大事な行事なのに、手も腫れて髪が結えないんです。

すごく高くなっていた血圧も、やがて二百から百八十、百六十と下がってきたので、薬も飲める状態になってきました。それでも、ものすごい痛みは止まらないんです。

「うちは、石垣島には行かないです。先生お願いですから、明日の大事な行事には出られるようにしてください」とお医者さんにお願いしました。そうしたら、いざという時のための痛み止めも持たせてくださいました。シチ祭の行事に出られるかみんなが心配しましたが、御嶽にあがっていったら、腫れが引いて目も少しずつあいてきました。やっぱりカン（神様）の力だねえ、と思いました。

私が刺された前の前の日には、西表島の隣の黒島で蜂に刺されて、死んだ人がいると聴かされました。ところが、なんとか無事に三日間のシチの行事が終わったら、また顔が膨れてきたの。手も足もふくれあがって、人に見せられないような姿になりました。頭なんか、骸骨から皮膚が浮き上がっているように感じました。髪の毛もやがてみんな抜けてしまいました。相撲取りが髪を切られて泣く気持ちがわかりました。それに私は相撲取りとは比較にならない、五十三年間ですよ！一昨年の暮れのことです。一年あまりかかってようやく治りましたが、顔つきもなんだか変わってしまったような気がします。靴も足が腫れたので大きいのを買わないと入らないほどでした。

神のものと仏のもの

ニライカナイというのは、西表の神司のニガイの言葉にもでてきますよ。

シマヌハティ　島々のはて
ムラヌハティハラ　村々のはてから
ニライカナイユー　ニライカナイの世を
ユビマネキ　呼び招き

あの世のことには、神司は関わらないですけれど、方言ではグショーヌシマ（後生の島）といいます。

ピンガン（彼岸）のときには、御嶽に入ってはいけません。神司も線香を上げに行きません。ピンガンは仏のものだから、神のものといっしょにしてはいけないのです。

ですから、神司はお葬式にはかかわりません。ただ、神司をつとめた人が亡くなった場合だけは特別で、神司が白いチョーキヌをつけて、マーニ（ヤシ科のコミノクロツグ）の葉をたすきにして、魔除けのダード（ダンチク）の杖をついて先導するんです。葬式の列とは、ミチマク（道幕）という白い布で隔てるんですが、それは、屋久島の雑誌（本誌六十三号）に載せてもらった写真の通りです。

一日一日を守られて

毎日仏壇にお茶湯して、お茶を差し上げて、線香を立てて、手を合わせてこういいます。

「今日の日をあけさせてくださってありがとうございます。今日もまた一日すごせるように見守ってくださいね。この恩納村で、毎日おもしろおかしく過ごさせていただき、悪しきものは遠くに遠ざけて、良きものは静かに静かに引き寄せて、お守りください……」と、そんなにして一日一日を守られて過ごしているんです。茶瓶もお湯を一杯にして仏壇にあげておくの。「ご自分で自由に呑んでください」ってね（笑い）。そして、自分が飲みたいときは、いつでもあそこに行って飲めるでしょう。そうすれば、自分の気持ちが許すし、面白くなるんです。バナナ一本でも仏壇にあげておいたら、いつでもおやつがわりにいただけるでしょう。すると、おやじの写真も笑っているし、おっかさんも見ていらっしゃるし、「守っておくねえ」と言っておられるような気持ち。遠いところまで大きな仏壇かついできたねぇ、と言われたりしますけど、私は持って歩かないと安心できないです。沖縄の人は、一日と十五日しかしないけれど、私は毎日しないと気が済まないんです。御嶽でしていたようにね。

畑の楽しみ

先生方は、田んぼや畑をしておられるから、私の畑をお見せしたいんです。見に行きましょう。西表島でも石垣島にいたときも畑なんかしたことがなかったんですよ。でも、恩納村に来てみたら、まわりの人がみんな畑をしておられて、野菜なんかくださるでしょう。もらうばっかりじゃ恥ずかしいと思ってね、自分でもやってみようと思ったのよ。はじめは、あの白い花の咲く助平草（アメリカセンダングサ）がいっぱいはびこった場所でした。

朝お茶を飲んで、パンをひとつ食べたら作業着つけて、フリルのある帽子をかぶって畑に行くのよ。テレビの番組を見ようと近所の人に誘われるけれど、それより畑がおもしろいのよ。気がついたら夕方になっていることもあるんです。近所の人たちは「あんたは、私たちを負かしてるねえ。花もきれいに咲かせて、あんたは武士だよ！」といって、みんな感心してくれるんです。

島の人たちへのことば

安渓先生ご夫妻に託してあいさつを送ってくださった、西表島のみなさんに、お礼の言葉を申し上げます。

島のみなさんには、失礼していますけれど、島にいる時のことを思い出して、それが楽しみです。いつまでも、私のことを覚えていてくださってありがとうございます。私もね、みなさまがたのことは忘れませんから。また、島にいて御嶽にいたときの勤めのことも、たいへんうれしく思っています。私は幸福ものだねえ、って感じています。今は普通の人間になってしまったのだから、これからは自分の自由な時間をもらいたいと思って、残り少ない人生を歩んでいこうと、この恩納村にきています。ここは、あなたがたが考えているような不便なヤンバルではないよ。海のはたでもない、山の中でもない、とってもいいところ。周囲もみんな学校の先生あがりでね、面白く話したりして暮らしていますから、どうぞ安心して、遊びに来て下さい。楽しいこともガバラッサル（くやしい）こともあるでしょうけれど、どうかみなさんがんばってくださいねえ。

別れがたい思いで

これまで健康で生きてこられたのも、神様が守ってくださったんだと思います。いまは八十年の人生のうちには、あんな楽しいこともあったねえ、つらいこともあったねえ、と思い出しながら、暮らしています。そして今日のように先生がたが訪ねてくださって、とてもうれしいわけ。先生がたには、屋久島の雑誌を贈ってもらって、「私のこと忘れていらっしゃらないねえ」と思って、うれしくて電話したけれど、何度かけてもいらっしゃらないでしょう。ですから、今度こちらにいら

っしゃると聞いてから、もう私はうれしくてうれしくて……。

私は、ずっと石垣島で過ごしていて、行事の時だけ西表島に帰るという生活をしていたでしょう。行事の時には神司は忙しいし、また世間話なんかもできないです。だから、島の人たちともそんなに話したことがなかったんです。今日は、たくさんいろんなお話ができて、本当に楽しかったです。朝いらしたのに、いつの間にかもう夜になってしまった。もうお帰りになるんだねぇ。ああ、行かせたくない、行かせたくない！

おわりに

まさに後ろ髪を引かれる思いでお別れしてきましたが、他の方には聞くことができないようなたくさんの教えをいただいたことをありがたく思っています。御嶽の行事のことについては、あまりにも多くの人が興味をもって調べておられるため、私どもは積極的に聞き取りをすることを避けてきました。親しくお話をうかがうことができて、本当によい勉強になりました。

西表島とはずいぶん離れていますけれど、山口県でも川の淀に沈んでいる柱材を削って雨乞いに使うという行事が八百年以上昔に東大寺を再建のために活躍した重源上人ゆかりの伝承として徳地町に残されています（赤木森「東大寺を建てた徳地の木」安渓遊地編『やまぐちは日本一』弦書房）。

田盛雪さんのすばらしい畑に負けないように、わが家でもと思っています。いつまでもお元気でお過ごし下さい。

（あんけい・たかこ、大学パート教員、
あんけい・ゆうじ、大学教員）